国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎カラー　討議セッション
スーダン難民

マクロコズム 2004.9

vol. 60

(財)青少年国際交流推進センター

討議セッション（2004年7月17日～21日）

「国際青年育成交流」事業は、皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、平成6年度より始められた事業で、日本青年の派遣と外国青年招へいの相互交流プログラムです。「討議セッション」は、招へい事業の一環として、日本青年との意見交換を目的として昨年から開催されているディスカッションを中心とした合宿型のプログラムで、今年度も、6コースの分野が設定され、参加者は、選択した希望コースによって分けられました。

国際社会と企業コース

▲ 社団法人経済同友会代表幹事
北城恪太郎氏と懇談

▲ 経済産業省訪問　中川昭一経済産業大臣と共に

三菱地所㈱訪問 ▶

ボランティア活動コース

▲ ホームレスの人達のボランティア活動を推進している
津田政明氏の講演

ホームレスの人たちのゴミひろい
ボランティアを共に体験 ▶

環境コース

◀大前純一アドバイザーの基調講演

▲ 秦野沢登

▲ グループディスカッション

情報コース

NTT docomo ▼

伝統文化コース

◀裏千家東京道場を訪問

▲ 江川京子アドバイザーの基調講演

教育コース

西平直アドバイザーの基調講演◀

▼ 基調講演の後に

〈Global Cafe〉～文化紹介～

ブース展示◀

各国紹介（ドミニカ共和国）▶

ODA50年
～開発援助の原点を考える（PART Ⅱ）～

特注メコン・ウオッチ代表理事　**松本　悟**

量的拡大の時代
～70年代から80年代～

次の時代に移りたいと思いますが、70年代から80年代にかけての時代です。日本の経済成長も続き、先進国の仲間入りというところに来るのですが、72年には、もはやアンタイド、先程言った様に、紐付き、日本企業を助けるためのODAを脱するために、政府借款のアンタイド化の導入を閣議決定しました。74年にはJICAができて、技術協力に本格的に入っていきます。76年には賠償が全て終わり、援助という意味からも、東南アジア、東アジアへの資金提供という意味からも、いったん「戦後」はここで終わることになります。ここからは量的拡大に向かいます。78年ODA第一次中期目標は3年でODAを倍増、81年の第二次には5年で倍増、そして85年、有名なプラザ合意によって急速に円高が進みます。日本のODAが増えることは、円の絶対額という以上に、円高によってドル換算で増えたというのがすごく大きいのです。従ってこの85年という年は、予算上は増えていないのに、為替レートによって数字は増えるわけです。この時期はまさに、量的拡大にとにかく走っていった時代だったと言えるかと思います。背景には、日本の貿易黒字が大きな国際問題になったことがあります。貿易黒字をど

主な内容

ODA 50年……5～8
～開発援助の原点を考える（PART Ⅱ）～
カンボジアから……9～11
スーダン難民に緊急支援を！……12～14
～チャドへのスーダン難民流入から
日本青年国際交流機構第20回全国大会
佐賀大会のお知らせ……16～17
日本青年国際交流機構設立20周年記念事業
Globle Photo Contestの募集……18～19
平成16年度ブロック大会日程……20

〈表紙の説明〉

母の膝の上で援助物資を待つ少女（ミレキャンプ）
～スーダン難民～

途上国援助50年小史（70～80年代）

1972年5月	政府借款のアンタイド化導入決定
1974年8月	国際協力事業団（JICA）設立
1976年7月	賠償完済
1978年7月	ODA第1次中期目標（3年で倍増）
1981年1月	ODA第2次中期目標（5年で倍増）
1985年9月	ODA第3次中期目標（プラザ合意）
この頃からマルコス疑惑などでODA批判	
1987年5月	資金還流構想発表
1988年5月	ODA第4次中期目標
1989年12月	ODA実績額初めて世界一に
1990年7月	世界銀行からの借款を全額返済

の様に資金還元していくか、ということが日本政府として重要な外交課題になり、それがこういう急速なODAの拡大という時代になったのです

この頃フィリピンのマルコス疑惑を中心にしたODA批判が非常に高まります。85年に朝日新聞社が『援助途上国日本』という本を出版しました。朝日新聞は83年から84年にかけて取材班を作りました。マルコス疑惑と言っても知らない人もいるかもしれません。当時フィリピンのマルコス大統領が、イメルダ夫人と共に自らのファミリーの私腹を肥すためにかなりODAを使ったという疑惑が、国会等々で問題になりました。86年秋の「革命」によってマルコス自体がハワイに追い出されますが、その頃援助をめぐって大きな批判が起きます。朝日新聞の本以外にも当時色々な本が出されました。量的拡大をし、その一方で質が伴わなかったのが、この時代だと思います。87年には、資金還流の構想、88年にはODAの第4次中期目標、これも前倒しになりましたが、89年にはついにODAの実績額が初めて世界1位になりました。現在、アメリカに次いで第2位ですが、アメリカのODAは結局イスラエルやエジプト、要するに戦略的な意味しかないものなので、実質的にODAは、この頃から日本が世界一だと言えると思います。90年代、日本は被援助国から脱します。つまり、世界銀行から借りていた援助を全て返済するのは1990年7月なのです。とても重要なことですが、日本ほど発展して経済規模が大きくなってようやく90年にODA債務を返せる、つまりODAの債務を全部返すというのはそれ程大変なことだ、日本ですらそうなのだから、今まで借りてきたフィリピン、タイ、インドネシア、中国等の国が、一体いつ完済できるのかは、誰にもわからないと思います。そういう意味からもODA債務を返すことは大変なことです。これが量的拡大の時代です。

それを折れ線グラフで見てみると、一番上の四角の印が日本です。今お話したようにプラザ合意が85年にあるので、85年以降の円高によってこれだけ急に伸びているわけです。そして89年に世界一位になります。その後もこういう伸びを示していくのですが、中曽根政権の時に大問題になり、橋本政権の時にODA削減ということでいったん大きく減りますが、また円高の影響等もあって増えたりし、最近はご存知の通り、ODAは毎年削減になっています。特にドル換算をしているためでもあり、為替変動の影響も受けて日本のODAは最近乱高下している様相です。

ODA 改革
～90年代以降～

最後に、90 年代以降の途上国援助はどうでしょうか。92 年ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで地球サミットが開かれます。ここで日本は環境 ODA という言葉を使い始め、8 千億円から 1 兆円を環境 ODA に振り分けることを打ち上げます。同じ年の同じ月に、ODA 大綱が閣議決定されます。「理念なき ODA」と先程も申し上げた通り ODA のスタートは賠償と日本企業支援ですから、何のための ODA なのかという理念作りがない中、マルコス疑惑とか、ODA 批判を浴びてきました。そうした中で、92 年宮沢政権時代に初めて ODA 大綱を作ったのです。そこで環境、人権、平和などの理念を初めてうたうようになりました。恐らく皆さんの知っている ODA の目的というのは、この頃から作られたもので、もともと 50 年間日本がずっと背負っていたものではありません。93 年に ODA の第 5 次中期計画。これもまだ右肩上がりを目指して 5 年で 5 割増ということになっています。95 年にはインドシナ総合開発フォーラム、これは ASEAN に関係するので書いてありますが、これでメコン地域をもう一度なんとかしようという音頭を日本政府が取るようになります。

一方、今まで全くなかった言葉がこの頃から出ます。「ODA 改革」という言葉です。80 年代までは殆ど ODA 改革は見られません。90 年代に入るとたくさんこの言葉を見ます。97 年には 21 世紀に向けての ODA 改革懇談会ができます。2002 年、一連の外務省不祥事があって外務省改革変える会というものができて、それによる改革案が出されます。

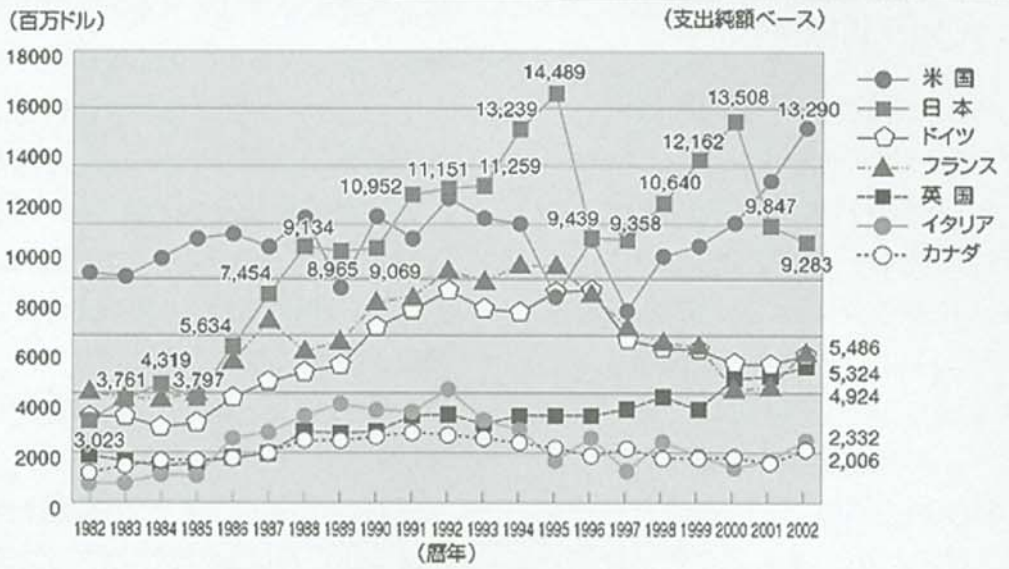
一方、市民社会との付き合いも重要になるのがこの頃で、98 年から NGO と財務省、あるいは外務省が定期協議を始めます。今度の 4 月 9 日に外務省と NGO が ODA に関して政策協議を行います。外務省もずっとやっています。今まで先々のことを考えずに援助してきたという批判もあり、2000 年から国別援助計画を策定するようになりました。

それから援助によって環境社会被害が起きています。これは 80 年代のマルコス疑惑の時からずっと言われることですが、それに対して 2002 年 4 月、私も関わった国際協力銀行の環境社会配慮ガイドラインが策定されます。JICA のものがもうすぐできます。人間の安全保障を掲げる緒方貞子さんが、昨年 10 月 JICA 独立行政法人の初代理事長になりました。一方今年から自衛隊によ

途上国援助50年小史（90年代以降）

1992 年 6 月	地球サミット、環境 ODA1 兆円計画
1992 年 6 月	ODA 大綱（環境、人権、平和）
1993 年 6 月	ODA 第 5 次中期計画（5 年で 5 割増）
1995 年 2 月	インドシナ総合開発フォーラム
1997 年 4 月	21 世紀に向けての ODA 改革懇談会
1998 年～	NGO と財務・外務省の定期協議
2000 年～	国別援助計画策定開始
2002 年 4 月	環境社会配慮ガイドライン策定
2002 年 7 月	外務省改革「変える会」最終報告
2003 年10月	緒方貞子氏が JICA 新理事長に
2004 年～	自衛隊によるイラク支援本格化

図表Ⅰ-1　DAC主要国のODA実績の推移



出典：2003年DACプレスリリース、2002年DAC議長報告
注：（1）東欧向け及び卒業国向け援助は含まない。
（2）1991年及び1992年の米国の実績値は、軍事債務救済を除く。

（ODA 白書 2003 年版より）

るイラク支援が本格化して、自衛隊派遣と ODA がどういう関わりになるのか、ということで色々な議論がなされるようになりました。そう言う意味で ODA はまた新しい課題を持ち、特に平和構築、紛争地での支援等が 50 年を終わった段階で今ホットな問題かと思います。このような感じで 50 年を迎えるわけです。

ODA と言いますが、50 年代から 2000 年を見ると大きく変わってきています。良い意味でも変わってきていますし、もう一つは、本当に必要なのかという議論を時々忘れかけている、続いているから続けようというところが、どうしてもあります。50 年というのは、ODA が何のために必要なのか、本当に必要なのかを問う意味で大事な時だと思います。

（次号へ続く）

カンボジアから

第3回「東南アジア青年の船」事業参加青年
プレアコソマ総合専門学院　**本橋　誠**

チュムリアップ・スオー！皆さん、こんにちは！カンボジアでは両手を合わせて「チュムリアップ・スオー」と、微笑みながら挨拶してくれるので心が和みます。今私はJICAのシニア海外ボランティアとして、プノンペンの理系の専門学校で英語を教えています。あっという間に2年近くが経ち、10月20日には任期終了です。そのことを考えるととても淋しい気がしますが、プノンペンでは同僚や友人に恵まれ、お互いに学び合うことができて、本当によかったと思っています。それでは首都プノンペンと配属先の学校についてレポートします。

▲ 卒業式で卒業生と共に、筆者左から三人め

《プノンペンでは》

インドシナ半島のタイ、ベトナム、ラオスに国境を接しているカンボジアの面積は日本の約半分の大きさで、人口は約十分の一です。長い間内乱が続いてきましたが、今は平和となり、みんなが国造りを目指して努力している若い国です。100万人の人口を抱える首都プノンペンの人達はとても教育熱心です。市内のあちこちでは小中高校に通う子供達をたくさん見かけます。朝7時前後にはバイクや自転車に乗り家族に送られ学校に通う子供達で通りは一杯です。一台のバイクに家族4～5人もが乗っているのにはびっくりします。危ないと思いつつも家族の絆が感じられ、微笑ましい光景でもあります。

街の中心地には通称「英語学校通り」という名前のストリートまであります。授業が終わると生徒達は一斉に教室を出て通りに繰り出します。すると、ここはまるで東京の繁華街のような賑わいを見せます。ポルポト時代に落ちてしまった出生率がその後戻って、一説によると、現在14歳から24歳までの全人口に対する割合は何と52%にまで達しているそうです。これはポルポト時代が1979年に終わりその反動で出生率が急激に上昇したからだそうです。経済的に恵まれない中で自分達は受けられなかった子供達の教育にかける姿は日本の戦後と似ているかもしれません。でも、出生率の低下に歯止めがかからない今の日本とはまったく逆の現象が起きています。

プノンペン市内の子供達は目抜き通りの歩道で夜9時過ぎまで遊んでいます。また、多くの学校、店、オフィス、住宅などが建設中で、街はとても活気に溢れています。そして、プノンペンでは多くの子供達が様々な仕事をして家計を助けます。例えば、あるマーケットでは5歳くらいの女の子が小さなナイフを使って野菜を切っているのが目に入り、心配になりました。でも、ちゃんとしっかり切っていてびっくりしました。こちらの子供達は家の手伝いをするのは当たり前ですし、靴磨きや花を売ったりしている子供達も良く見かけます。また、ゴミの中からリサイクルできるものを集める小学生も多くいます。小中高校すべての学校が午前と午後の二部制と取っているため、学校に通っていても半日は働くことができるのです。

《プレアコソマ総合技術専門学院》

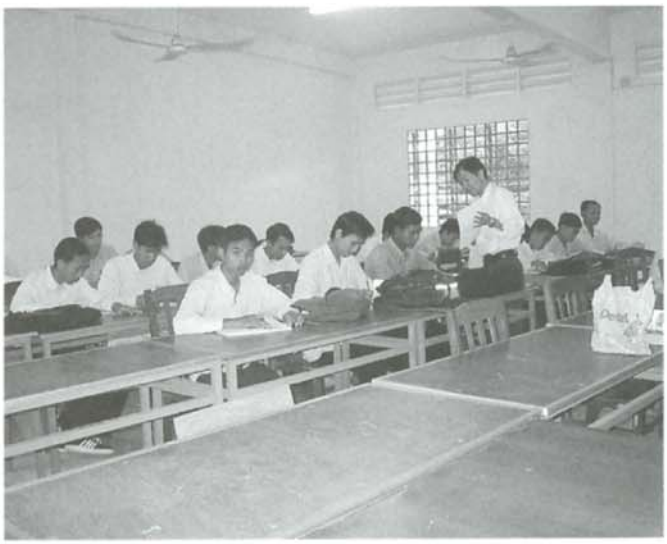
私の配属先のプレアコソマには土木工学・電気工学・電子工学の三つのコースがあります。それぞれに中卒者のための初等コース（3年）、高卒者のための専門学校レベル（2年）とエンジニア学部レベル（5年）があります。全部で18クラス、約520名が国から奨学金を与えられ、朝7時から12時まで毎日5時間、月曜日から土曜日まで学んでいます。午後と夜間は有料コースもあり、別の学生の約500名が学んでいます。この有料コースは、国から与えられる月給が約30ドルとプノンペンで生活するには十分でない教員の生活を補うために設けられるもので、いわばアルバイトです。午後の有料コースからの収入がプノンペンで生活するうえで是非とも必要になるためです。

私は総合英語と技術英語の2科目を教えています。任されている主な業務は、《①英語科教室の改善、②学生·教職員への英語の授業、③教材·テキストの作成》です。

学生達は主に17歳から24～5歳が中心ですが、中には30代前半もいます。経済的に恵まれず、仕事をしてから再び技術を身に付けキャリアアップを図りたいと思い、入学を決意する学生もかなりいます。ほとんどの学生がバイクか自転車で学校に通います。プノンペン市内には通勤通学手段としてバスや鉄道はなく、バイクタクシーしかありません。

多くの学生達は英語をしっかり勉強して話せるようになりたいと思っています。というのもプノンペンでは英語ができるということはより良い仕事への足がかりになったり、或いは、同じ会社にいても外国人との取引などを任され、給料が上がることを意味するからです。しかし現実には、中学校、高校の英語の授業は週2時間しかなく十分ではありません。プレアコソマも現在は週2時間

だけです。しかし、英語教育の重要性から来年度から週 3 ～ 4 時間への移行も検討されています。プレアコソマは、無料で学べ、かつ学部レベルまであるということで経済的にはあまり恵まれていない学生が多くいます。例えば、クラス平均 30 名のうち英語の辞書を授業に持って来ている学生は 2 ～ 3 名にすぎません。日本のように無料のラジオ・テレビ語学講座もありません。また、カセット・CD 教材などを家庭で使える学生はごく少数です。



▲ 授業風景

《プノンペンで英語を教えて学んだこと》

カンボジアでは教員が教室に入るやいなや学生全員がさっと立ち上がります。特に日本のように号令はかけません。小学生のときから一斉に起立する訓練ができているようです。また、答案を返却するときなど必ず両手で受け取ります。教員への尊敬の念が感じられます。と同時に人懐こさも感ることも多くあります。たくさんの学生が "Good morning! How are you?" と微笑みながら声を掛けてくれます。日本ではあまり見られなくなってしまったものがカンボジアには残っています。

日本人との相違点と言えば、たとえあまり英語ができなくても質問をしてくるなど、会話を積極的に行うことが挙げられます。文法的な間違いなどは、あまり気にせず恥ずかしがらずに発言します。この点について日本人が学ぶべきことは多いのではないでしょうか。話すことを学んでいるときに、完全な文を言おうとするのは元々無理があります。多少間違っていてもどんどん声に出していくことによって話せるようになると思います。英語のみを使用して英語を教えていて、特にそう感じます。英語を使ってコミュニケーションを取りながら、英語を教えることが大事だということを実感し、英語教授法についていろいろと工夫しながら学べたのが最大の収穫です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

本橋誠さんは、第 3 回「東南アジア青年の船」の参加された後、本事業の国内受入れにおけるボランティアなどで事後活動に貢献するとともに、アップ・ウィズ・ピープルの活動で世界を回りました。高校の英語教師をされていましたが、JICA のシニア海外ボランティアで、2002 年 10 月に英語教師としてカンボジアに赴任しました。

スーダン難民に緊急支援を！

認定NPO法人 日本国連HCR協会　**中村　恵**
（第23回「東南アジア青年の船」ナショナル・リーダー）

マクロコズム2004.1号にて、「難民問題に取り組む国連の活動を民間から支援する」という記事を投稿し、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の活動を紹介させていただきました。その際に募金の呼びかけに応えてくださった皆様には、この紙面を借りて御礼申し上げます。

その後、チャドにスーダン難民が流入するという緊急事態が深刻となり、UNHCRは、全世界に緊急募金アピールを発信しました。以下、現状をレポートします。

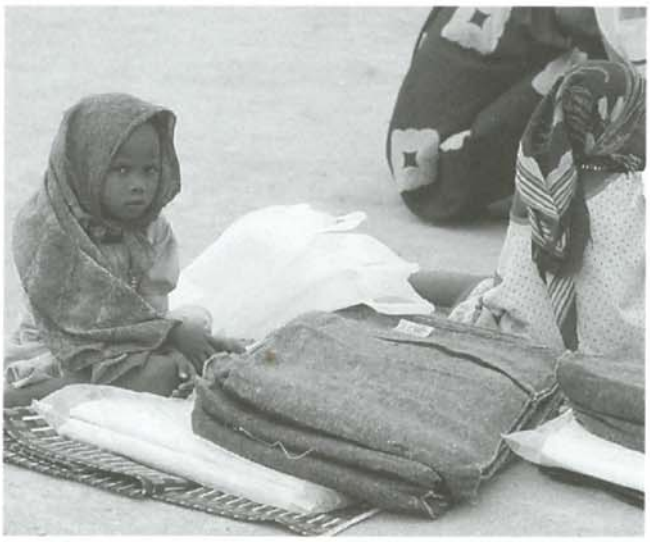
ダルフール地方の人道危機

イラクやアフガニスタン関連ニュースの影に隠れていますが、昨年以降、スーダン西部ダルフール地方から隣国チャドへ難民が避難する緊急事態が続いています。アラブ系民兵が非アラブ系黒人住民に対し、襲撃、暴行、空爆を繰り返しているからです。チャドへ脱出した難民の数は20万人に達する勢いで増え続けています。その一方でチャドに脱出できず、自分の家にも戻ることができない国内避難民が約120万人います。

UNHCRは緊急支援に当初の予定を大幅に上回る総額5,580万ドル（約60億円）を必要としています。

困難な援助活動

UNHCRはチャド東部やダルフール地方に新しいオフィスを開設し、人員も増やして援助活動を進めています。チャド政府の協力を得て、10か所に難民キャンプを設営し、約15万人の難民を保護しています。危険な国境地帯から難民キャンプへの移送を急いでいますが、トラックが不足している上に、舗装路のない砂漠地帯での移動には時間がかかります。トラックを待てずに自力でキャンプに辿り着く難民は後を絶ちません。



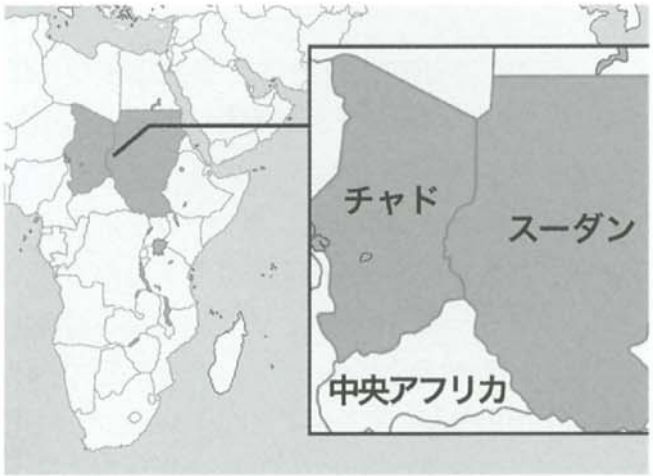
▲ 毛布などの援助物資の支給（ミレキャンプ）

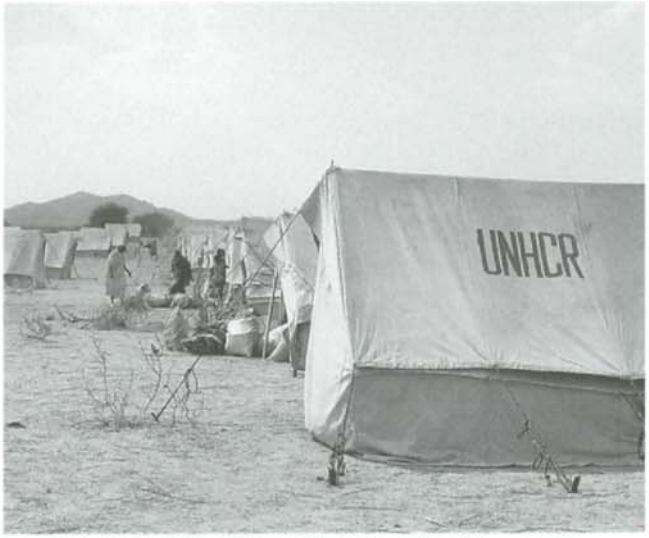
UNHCRは世界各地の備蓄倉庫から、援助物資を各難民キャンプに輸送していますが、もっとも深刻な問題は水不足です。ただでさえ水が少ない地域で、急増した難民に十分な水を支給するのは非常に困難です。UNHCRの目安とする一人15リットル／日には程遠い状態です。6月から9月は雨季に入り、舗装路もないこの地域では、全て

の援助活動が困難を極めます。また雨によって汚物が流れ出すと、キャンプ内の衛生状態が悪化しコレラなどの伝染病の発生が心配されます。

悪化する状況

6月にはHCR協会スタッフの井上清治が現地を訪問しました（カラーP.21参照）。その後、さらにスーダン難民を取り巻く環境は悪化しています。たとえば収容能力が2万5,000人のブレジングキャンプには現在3万6,000人の難民がいます。7月にはファルシャナキャンプとブレジングキャンプで援助関係者が難民に襲われる事件がありました。国際社会の関心が低く、援助物資が滞る状況で、難民のストレスは頂点に達しつつあります。8月に入って、武装した男2人が国境を越えて、12歳の子どもを含む4人を殺害する事件がありました。チャド内の難民キャンプより、さらに援助活動に制約を受けるダルフール地方の国内避難民120万人の状況はさらに深刻で予断を許しません。





▲ UNHCR支給のテント群（ブレジングキャンプ）

難民を支えた地元民

チャドの人々はスーダンからの難民を温かく迎え入れました。決して豊かではないチャドの人々が、貴重な水や食糧を難民に分け与えていたのです。最近の調査でスーダン難民の子どもの約40%が栄養失調であり、チャドの地元民にも栄養失調が広がっているという結果が出ました。井上が会った複数のチャド政府関係者は「難民のみならず、難民を支えた地元民への援助も忘れないで欲しい」と異口同音に話していたそうです。豊かな日本に暮らす私たちも、難民となった人々に何かできるのではないでしょうか。

皆様のご支援を!!

井上が滞在した一週間、日中の気温は50度、夜でも40度、眠ることすら困難であり、風が強い日は口や鼻の中が砂だらけになったそうです。このような厳しい自然環境の中で、苦難に直面しているスーダン難民、温かく難民を迎え入れた地

元民、まだダルフール地方に残って身の危険に怯える国内避難民、そして援助活動に携わる人道支援機関の職員を、私たち一人一人が支えることができればと願っています。

▲ テントの支給を待つ間、低木に身を寄せるスーダン難民（ファルシャナキャンプ）

寄附のお願い

日本国連 HCR 協会は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の日本における公式寄附窓口です。皆様のご寄附は税控除の対象となります。
郵便局にて募金を受け付けております。（手数料協会負担）

◇郵便振替口座：00140－6－569575
◇加 入 者 名：HCR 協会
◇通信欄に「MC 係・スーダン難民支援」とご記入ください。

お問合せ：日本国連 HCR 協会
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5－53－70
UN ハウス 6 階　UNHCR 内
Tel 03-3499-2450　Fax 03-3499-2273
E-mail info@japanforunhcr.org
HP www.japanforunhcr.org

帰国報告会＆料理交流会ノススメ

富山県青年国際交流機構事務局長
日南田　美幸

青年国際交流事業に参加していっぱいできた思い出や感じたことを披露する帰国報告会。そんな帰国報告会をより多くの人に、より楽しくということで、今年度は平成 16 年 3 月 7 日（日）の帰国報告会に料理交流会を組み合わせて開催しました。

「日本・韓国青年親善交流」「世界青年の船」の既参加青年による帰国報告会のあと、マレーシア、セルビア・モンテネグロ、ロシア、中国の 4 カ国の方々に料理を教えていただきました。マレーシアは、今回の実行委員長 笹島陽子さんの提案で、同期の「東南アジア青年の船」既参加青年であるマレーシア人の張偉強さんにお願いできたことは、既参加青年のネットワークを活用できたということでも、とても有意義であったと思います。笹島さんは、張さんとの打ち合わせに岡山まで週末出かけるといった熱心さで、張さんは遥々岡山から参加してたくさんのマレーシア料理を作って、会を盛り上げてくださいました。今後も日本在住の既参加外国人青年にどんどん参画し

ていただけたらと思います。

また、JET プログラム SEA として富山在住のセルビア・モンテネグロ出身のスロボダンさんにセルビア料理をお願いしました。交流会直前 2 週間ぐらい帰国し、日本へもどられるのが料理交流会前日夜ということだったのですが、「しばらく一時帰国するが、ぜひ国や料理を紹介したい。前日帰国なので、材料を持ち帰るなど、かえっていろいろなことができるのでは？」とおっしゃって、その自分の国をぜひ紹介したいという意気込みに感動し、お願いすることになりました。担当は遠距離をメールで埋めて大変だったようですが、当日は大盛況でした。

といった具合にそれぞれの国の登場にはいろいろな裏話がありましたが、準備時間が充分でなかったにもかかわらず、若いスタッフの力で無事成功裡に終えることができ本当によかったと思います。

また当会では今年 1 月に「世界青年の船」の受入れをしたのですが、そのときのホストファミリーの方々も何人も参加いただきました。帰国報告会では「子どもたちは船でどんな生活を送っていたのかな」という親のような眼差しで聞き入っておられる様子に、多くの方に支えられている事業の意義深さを感じました。今回のホストファミリーの方々にとっても、このイベントが、子どもたちの様子を知るよい機会であったと共に、よい情報交換の場を提供できたことは思わぬ副産物でした。

一つ一つのイベントが何らかの形で次に繋がっていくものであればいいなあとつくづく思いました。今年 9 月に受入れる予定の「東南アジア青年の船」の宣伝もしつつ、来年度も何か楽しいことを企画し開催できたらと思った一日でした。

県の担当者の方をはじめ、御協力いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

今回の全国大会では、IYEO、国際交流の魅力、そして佐賀の魅力を存分に浸れる内容になるよう、決して多いとは言えない佐賀IYEOのメンバーが盛りだくさんの企画で準備を進めております。参加者の皆様から『IYEO、国際交流ってやっぱりいいね！』『佐賀ってなかなかいいね！』のお言葉が頂けることを願って、一人でも多くのご参加をお待ちいたしております。

日本青年国際交流機構第20回全国大会佐賀大会実行委員会一同

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第20回全国大会
第11回青少年国際交流全国フォーラム
佐賀大会

「佐賀から世界へ！Step up And Go into Action in SAGA!!」

★目　　的　内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加者青年相互の交流と研鑽を図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。

★主　　催　内閣府政策統括官(総合企画調整担当)　(財)青少年国際交流推進センター
日本青少年国際交流機構　佐賀県青年国際交流機構

★後　　援　佐賀県、大和町（予定）

★主　　管　日本青年国際交流機構第20回全国大会佐賀大会実行委員会

★期　　日　平成16年11月6日（土）～7日（日）

★会　　場　ホテル龍登園　〒840-0203　佐賀県佐賀郡大和町大字梅野120番地
（佐賀駅、佐賀インターより送迎の予定）

★対 象 者　内閣府、地方公共団体等が実施した青少年国際交流事業の既参加青年
国際交流活動に関心のある方

★参 加 費　同封の振込用紙を切り取り、必要事項を記入の上、参加費のみをお振込み下さい。
早期申込者の方には素敵なプレゼントをご用意しています！
一般宿泊：15,000円（非宿泊6,000円）　中高生宿泊：12,000円（非宿泊4,000円）
小学生以下宿泊：8,000円（非宿泊2,000円）　フォーラムのみの参加　1,000円
※食事・寝具不要の幼児は無料　※宿泊は朝食と懇親会込み

＜問合わせ先＞日本青年国際交流機構第20回全国大会　事務局　福地峰雄
Tel&Fax：(0955) 25-0021　E-mail：sagaiyeo@hotmail.com

～プログラム～

第1日目　11月6日(土)

13:00～　　受付　＊一ノ瀬泰造氏写真展 同時開催

14:00～14:30　　開会式

14:30～16:00　　基調講演：「船乗りから見た国際交流」　講師：「にっぽん丸」元船長　渡辺輝夫氏

「にっぽん丸」元船長の講師から、私たちとは違った視点で捉えた国際交流についての御意見をお話ししていただきます。

16:15～17:30　　テーマ別分科会

①「海洋民族ポリネシア人」(講師：渡辺　輝夫　氏（「にっぽん丸」元船長)

海での経験豊富な講師がライフワークとしているポリネシアの歴史・文化について、分かりやすく解説します。

②「熱気球大会を100倍楽しむ法」

バルーンフェスタの歴史から競技内容の説明まで、大会観覧が楽しくなるような情報をお伝えします。会場の一角にバルーンのゴンドラ（実物）展示も予定しています。

③「分かち合おう！子供たちへつなげる国際交流体験」

佐賀をはじめとする九州ブロック IYEO 会員を講師に、自らの経験談を中心に教育の観点から語り、参加者からも経験談を聞く時間を設けることで、会員同士の経験や問題点、提案などの共有を図ります。

④「やってみよう！磁器に絵付け体験 －世界にひとつだけの器」

佐賀県が誇る特産物のひとつである磁器に絵付けを体験、「世界にひとつだけ」の作品を作ります。作品は業者によって焼き上げられ、御自宅に送付します。

(別途体験材料費700円と送料が必要となります)

⑤「受け継ごう！一ノ瀬泰造さんの遺志 －戦場に消えたカメラマン」

浅野忠信主演映画『地雷を踏んだらサヨウナラ』等で知られる戦場カメラマン、一ノ瀬泰造氏（佐賀県出身）の高校時代の恩師を講師に迎え、等身大の泰造氏を語っていただきます。

17:30～19:00　　チェックイン・記念撮影

19:00～21:00　　懇親会、IYEO 全国物産展オークション、アトラクション

第2日目　11月7日（日）

06:00～08:30　　バルーン競技飛行見学ツアー（希望者）

競技会の華、バルーンが一斉に打ち上げられる瞬間を観覧するツアーです。

先着50名の受付になりますので、大会参加申し込みはお早めに。

～09:30　　朝食、チェックアウト

09:30～10:30　　内閣府事業参加報告会

10:30～11:00　　閉会式

11:00～　　オプショナルツアー（詳細は振込用紙裏面にてご確認ください）

【*Global Photo Contest 2004* 開催について】

2004 年 3 月に内閣府主催で実施された「世界青年の船」事業「既参加青年東京連絡会議」に、日本の事後活動組織である日本青年国際交流機構と世界 10 か国からの代表者が出席し、事後活動についての協議がなされた中で、いくつかのプロジェクトが提案されました。

Global Photo Project は、それらの案の一つである「芸術イベント」を、日本の東京連絡会議実行委員が中心となる「SWYAA Art Project Team」によって具体化させたもので、国内と世界に広がる会員のネットワークを活用して文化交流を促進させると共に、さらなるネットワークの強化を目的としています。

今年度の取り組みとしては、「**食のある風景**」をテーマとした**写真**を世界中から集めて投票を行い、優秀作品 50 点を選定・パネル加工し、日本全国・世界各国で展覧会の実施ができる Global Photo Box を作成いたします。

このプロジェクトの取りまとめは、日本青年国際交流機構が行い、海外への広報及び写真集約については、「世界青年の船」事業事後活動組織(The Ship for World Youth Alumni Association, SWYAA)が協力します。なお、この事業は日本青年国際交流機構設立 20 周年記念事業の一つとして実施し、20 周年の年となる 2005 年のマクロコズムの表紙を入賞作品が飾る予定です。

- **ね　ら　い**　- 世界中から素材を集め、国際理解を深めることを目的としたキットを作る
  - IYEO 会員が国際交流を思い出すきっかけを作り、活動活性化につなげる
  - 事業、世代を越えた交流ができる場を提供する　…そして何より***楽しむ！***
- **主　　催**　日本青年国際交流機構
- **主　　管**　Global Photo Project Team
- **後　　援**　(財)青少年国際交流推進センター
- **応募資格**　日本青年国際交流機構会員
- **応募テーマ**　***「食のある風景」***

  今年度は「食」をテーマとして作品を募集します。食を囲んだ国際交流の様子や家族団らんの様子など、楽しい写真をお待ちしております。

- **応募方法**　応募に際しましては、以下の点にご注意ください。

■ 応募の際には、所定の申込書に必要事項をご記入の上、作品(デジタル媒体の場合は保存メディア)と一緒に、期日(2004 年 10 月 8 日(金)　当日消印有効)までに IYEO 事務局までにご郵送ください。申込書は IYEO 事務局にお取り寄せ(FAX または郵送いたします)いただくか、ホームページ(http://www.iyeo.or.jp/swyaa/photo/)からダウンロードしてください。

■ 応募作品はお一人 2 点までとさせていただき、未発表のものに限ります。作品の返却は入賞の有無に関わらずいたしません。

■ デジタル画像は、入賞作品を展示可能なサイズに拡大する都合上、画素数 200 万画素以上のデジタルカメラを使用し、ファインモード以上で撮影された作品のみに限らせていただきます。

- 作品は、家庭用プリンターまたはデジタル DPE にて L 版以上のサイズで出力したもの、または記録媒体（フロッピーディスク、CD-R/RW、DVD±R/RW、MO）に保存したものをご送付ください。送付された記録媒体は原則として返却いたしません。
- 保存形式は JPEG または TIFF とさせていただきますが、電子メールにて作品を送信される場合、ファイル容量の上限を 10 メガバイトとさせていただきます。
- デジタル画像を加工（レタッチ、トリミング等）された場合には、応募の際にその旨お知らせください（加工により作品の評価に影響を与えるものではありません）。

・ **投票方法**　IYEO 全国大会佐賀大会及び IYEO ホームページ上で投票をしていただきます。投票 URL については次号マクロコズムでお知らせします。

・ **Global Photo Box について**

優秀作品を拡大・ラミネート加工した写真をケースに納め、写真展や説明会等でご活用いただける「**Global Photo Box**」として貸出しを行います。

・ **今後のスケジュール**

2004 年 9 月 10 日応募受付開始	
	MACROCOSM9 月号、SWY-NEWS、メーリングリスト等にて広報
2004 年 10 月 11 日応募締め切り	
2004 年 10 月 12 日～	事務局による第一次審査
2004 年 11 月 6 日、7 日	IYEO 全国大会佐賀大会にて IYEO 会員による投票
2004 年 11 月 8～15 日	ホームページ上での電子投票（予定）
2004 年 11 月下旬	投票集計
2004 年 12 月中旬	入賞作品（50 点）発表及び各賞の発表
2004 年 1 月～	日本各地・世界各国に Global Photo Box 貸出し／展示会開催

・ **Global Photo Project Team メンバー**

野尻　恵梨子(SWY15)　田中　久美子(SWY14)　稲葉　信二(SWY14)
小林　真由美(SWY3)　田中　佐代子（SWYAA Art Project IYEO 事務局担当）
酒井　昇（IYEO 事務局）

＜問い合わせ・作品の送付先＞

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 2-35-1 東京海苔会館 6 階
日本青年国際交流機構　Global Photo Project Team（担当：田中、酒井）
TEL: 03-3249-0767　　電子メール: photo2004@iyeo.or.jp （問い合わせのみ）
作品送付先アドレス: globalphoto2004@aol.com

平成16年度青少年国際交流を考える集い（ブロック大会）開催日程

平成16年度のブロック大会も3大会が終了しています。8月に開催された福井における北信越ブロック大会は、豪雨の被害の直後で開催が危ぶまれましたが、福井県青友会の頑張りとブロック内の連携そして福井県の協力のもと、山本雅俊副知事をお迎えして有意義な時間を持つことができました。また、鳥取県で開催された中国ブロック大会には、野坂康夫米子市長の講演と事業報告会が行われ、国際交流活動の大切さを改めて認識し合うことができました。

ブロック	開催府県	開　催　日	ブロック構成都道府県
北海道・東北	山形県	10月23日～24日	北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島
北信越	福井県	8月21日～22日	新潟・長野・富山・石川・福井
東海	愛知県	10月23日～24日	静岡・愛知・岐阜・三重
近畿	和歌山県	10月 2日～ 3日	滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山
中国	鳥取県	8月21日～22日	鳥取・島根・岡山・広島・山口
四国	高知県	12月 4日～ 5日	徳島・香川・愛媛・高知
九州	佐賀県	11月 6日～ 7日（全国大会と同時開催）	福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄

編集後記

日本でも世界でも、悲惨な事件や事故、テロの報道が続いています。こうした内容を見ていると暗くなりがちですが、多くの人々が毎日を一所懸命生きていることを認識し合って、明るく前向きでありたいものです。相互理解のための国際交流の場の重要性を改めて感じる今日この頃です。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　9月号　Vol. 60　2004年9月1日発行（隔月発行）

編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14
TEL　03-3249-0767
FAX　03-3639-2436
e-mail　hq@iyeo.or.jp
URL　http://www.centerye.org (IYEO)

編集協力：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢文社
TEL　03-3959-3960

スーダン難民に緊急支援を！

（本文参照 P.12 ～ 14）

昨年から、スーダン西部ダルフール地方からチャドへの難民が避難する緊急事態が続いており、UNHCR では、緊急支援のために総額 5,580 万ドルを必要としている事態です。（写真：日本国連 HCR 協会　井上清治）詳細は、本文 12 ページからの中村恵さんの投稿原稿を是非お読み下さい。

▲ キャンプに到着して登録を待つ母子（ミレキャンプ）

難民キャンプでは赤ん坊を抱く若い女性が多い（ファルシャナキャンプ）▼

▼ 危険な国境地帯からトラックで難民キャンプに到着（ミレキャンプ）

雨季の影響で立ち往生する UNHCR のトラック ▼

16th SSEAYP International General Assembly (SIGA)

▲ 第16回 SAGA 実行委員長の
Mr.Abudul Muthalif Said Mohamad

▲ 青少年スポーツ省政務官から記念品をいただく
IYEO 田中会長

各国同窓会代表者がパネリストを囲んで ▶

昨年は、SARS の影響で延期となっていました第16回SAGAが、マレーシア同窓会の努力により、4月29日〜5月3日の日程でクアラルンプールにて盛大に開催されました。

▲ 第2回「東南アジア青年の船」参加者である
田中治彦立教大学教授がパネリストとして登壇（右端）

▼ パネルディスカッションの後の分科会

1973年2月14日。一隻の大型客船が横浜を出航しました。歴史的な日本初の世界一周クルーズへの出発です。それが、初代「にっぽん丸」。現在の「にっぽん丸」はそれから数えて3代目です。この間、私たちは、日本のクルーズの先駆者として、新しいクルーズや様々なサービスを開発してきました。例えば、日本船初めての展望浴場などは、ほんの一例。また、私たちの長い経験の集大成である独自の船内プログラムが、他の日本客船全てのお手本になっていたりもします。

ところで豪華客船でのクルーズと言うと、リタイア後の老夫婦がのんびりと旅をされているイメージをお持ちではないでしょうか。でも、「にっぽん丸」に乗船してこられるお客様は、驚く程アクティブな方が多いのです。いや、アクティブになられると言った方が正しいのかもしれません。これまでの人生になかった新しい体験を、船の上で得た新しい仲間達と一緒に貪欲に吸収されるのです。

自ら進んで何か新しいものを得ようとする気持ちを冒険と言うとすれば、冒険には年齢や性別なんて関係ない、私たちは、そんな皆さんの想いを満足させることを一番大切に考えています。そして私たち自身も、お客様に負けないくらいに、いつも新しい事に挑戦して行こうと思っています。これまでも、ずっとそうして来たように。

にっぽん丸は、米国公衆衛生局（USPH）による船舶衛生検査において、3年連続で日本船最高得点を獲得しました。

クルーズデスク フリーダイヤル
0120-791-211

商船三井客船
http://www.mopas.co.jp

美しい時代へ── 東急グループ

旅も楽しめる合宿にしたい。

急に1週間の全国出張になった。

ひとりひとりに、満点旅行。

ONE
to
ONE

家族水入らずで楽しめるプランを。

北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、
あなたの旅をさらに快適に。

どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様に満足していただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、多彩な商品をご用意。IT活用による最新情報入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして旅を熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考えます。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
http://www.tokyukanko.com
http://tour.tokyu.com

マクロコズム 2004年9月号 通巻六十号隔月発行 定価一九八円（本体一八九円） 編集協力：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）日本青年国際交流機構